

わがはいは猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当けんとうがつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番穢悪どうあくな種族であつたそうだ。この書生というのは時々我々を捕つかまえて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ彼の掌てのひらに載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものを見始めであらう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶やかんだ。その後猫にもだいたい逢あつたがこんな片輪かたわには一度も出会でくわした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ふうふうと煙けむりを吹く。どうも咽むせぼくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草たばこというものである事はようやくこの頃知つた。この書生の掌の裏うちでしばらくはよい心持に坐つておつたが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗むやみに眼が廻る。胸が悪くなる。到底とうてい助からないと思つていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおつた兄弟が一足歩きも見えぬ。肝心かんじんの母親さえ姿を隠してしまつた。その上今までの所とは違つて無暗むやみに明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子ようすがおかしいと、そのそ這はい出して見ると非常に痛い。吾輩は藁わらの上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考えて見た。別にこれという分別ふんべつも出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物くいもののある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左ひだりに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這はつて行くとうやくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入はいつたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れずれた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍ろばうに餓死がしたかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云いつたものだ。この垣根の穴は今日こんにちに至るまで吾輩が隣家となりの三毛を訪問する時の通路になつてゐる。さて邸やしきへは忍び込んだもののこれから先どうして善いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて来るという始末でもう一刻の猶予ゆうよが出来なくなつた。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入つておつたのだ。ここで吾輩は彼かの書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇そうぐうしたのである。第一に逢つたのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋くびすじをつかんで表へ抛ほうり出した。いやこれは駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙すきを見て台所へ這はい上あがつた。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになつた。この間おさんの三馬さんまを偷ぬすんでこの返報をしてやつてから、やつと胸の痞つかえが下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家うちの主人が騒々しい何だといひながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿やどなしの小猫がいくら出しても御台所おだいどころへ上あがつて来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を撫ひねりながら吾輩の顔をしばらく眺ながめておつたが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入はいつてしまつた。主人はあまり口を聞かぬ人に見えた。下女は口惜くやしそうに吾輩を台所へ抛ほうり出した。かくして吾輩はついにこの家うちを自分の住家すみかと極きめる事にしたのである。吾輩の主人は滅多めつたに吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入つたぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思つてゐる。当人も勉強家であるかのごとく見せてゐる。しかし實際はうちのものがいうような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗のぞいて見るが、彼はよく昼寝ひるねをしている事がある。時々読みかけてある本の上に涎だれをたらしている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色たんこうしよくを帯びて弾力のない不活潑ふかつぱつな徴候をあらわしている。その癖に大飯を食う。大飯を食つた後あとでタカジャスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂

らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽らくなものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が来る度たびに何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにはなほだ不人望であつた。どこへ行つても跳はね付けられて相手にしてくれ手がなかった。いかに珍重されなかつたかは、今日こんにちに至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍そばにいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝ひざの上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中せなかに乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかったからやむを得るのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃めしびつの上、夜は炬燵こたつの上、天気の良い日は縁側えんがわへ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは夜よに入つてこのうちの小供の寢床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入はいつて一間ひとまへ寝る。吾輩はいつても彼等の中間に己おのれを容いるべき余地を見出みいだしてどうか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒さますが最後大変な事になる。小供は——ことに小さい方が質たちがわるい——猫が来た猫が来たといつて夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必かならず眼をさまして次の部屋から飛び出して来る。現にせんだつてなどは物指ものさしで尻ぺたをひどく叩たたかれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等是我儘がままなものと断言せざるを得ないようになった。ことに吾輩が時々同衾どうきんする小供のごときに至つては言語同断ごんごどうだんである。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛ほうり出したり、へつついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内かない総がかりで追い廻して迫害を加える。この間もちよつと畳で爪を磨といだら細君が非常に怒おこつてそれから容易に座敷へ入いれない。台所の板の間で他ひとが顫ふるえていても一向いっつこう平気なものである。吾輩の尊敬する筋向すじむこうの白君などは逢あう度毎たびごとに人間ほど不人情なものはないと言つておらるる。白君は先日玉のような子猫を四疋座うまれたのである。ところがその家うちの書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四疋ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族ねこぞくが親子の愛を完まつたくして美しい家族的生活をするには人間と戦つてこれを剿滅そうめつせねばならぬといわれた。一々もつともの議論と思う。また隣の三毛みけ君などは人間が所有権という事を解していないといつて大おおきに憤慨している。元来我々同族間では目刺めざしの頭でも鰻ぼらの臍へそでも一番先に見付けたものがこれを食う権利があるものとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善いぐらいのものだ。しかるに彼等人間は毫ごうもこの觀念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のために掠奪りやくだつせらるるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪うばつてすましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持つてゐる。吾輩は教師の家に住んでゐるだけ、こんな事に関すると両君よりもむしろ楽である。ただその日その日がかこうにか送られればよい。いくら人間だつて、そういつまでも榮える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘わがままで思い出したからちよつと吾輩の家の主人がこの我儘で失敗した話をしよう。元来この主人は何といつて人に勝すぐれて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほととぎすへ投書をしたり、新体詩を明星へ出したり、間違いだらけの英文をかいいたり、時によると弓に凝こつたり、謡うたいを習つたり、またあるときはヴァイオリンなどをブー・ブー鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつておらん。その癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架こうかの中で謡をうたつて、近所で後架先生こうかせんせいと渾名あだなをつけられてゐるにも関せず一向いっつこう平気なもので、やはりこれは平たいらの宗盛むねもりにて候そうろうを繰返している。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいである。この主人がどういう考になつたのか吾輩の住み込んでから一月ばかり後のちのある月の月給日に、大きな包みを提さげてあわただしく歸つて来た。何を買つて来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から自分の間というものは毎日毎日書齋で昼寝もしないで絵ばかりかいてゐる。しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり甘うまくないと思つたものか、ある日その友人で美学とかをやっている人が来た時に下しものような話をしてゐるのを聞いた。

「どうも甘うまかけないものだね。人を見ると何でもないようだが自みずから筆をとつて見ると今更いまさらのようにむずかしく感ずる」これは主人の述懐じゆつかいである。なるほど許いつわりのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡越めがねごしに主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで画えがかけ

訳のものではない。昔むかし以太利イタリーの大家アンドレア・デル・サルトが言った事がある。画をかくなら何でも自然その物を写せ。天に星辰せいしんあり。地に露華ろかあり。飛ぶに禽とりあり。走るに獣けものあり。池に金魚あり。枯木こぼくに寒鴉かんああり。自然はこれ一幅の大活画だいかつがなりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思うならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいった事があるかい。ちつとも知らなかった。なるほどこりやもつともだ。実にその通りだ」と主人は無暗むやみに感心している。金縁の裏には嘲あざけるような笑わらいが見えた。

その翌日吾輩は例のごとく椽側えんがわに出て心持善く昼寝ひるねをしていたら、主人が例になく書斎から出て来て吾輩の後うしろで何かしきりにやっている。ふと眼が覚めて何をしているかと一分いちぶばかり細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルトを極きめ込んでいる。吾輩はこの有様を見て覚えす失笑するのを禁じ得なかった。彼は彼の友に揶揄やゆせられたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩はすでに十分じゅうぶん寝た。欠伸あくびがしたくてたまらない。しかしせっかく主人が熱心に筆を執とっているのを動いては気の毒だと思つて、じつと辛棒しんぼうしておった。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩いろどっている。吾輩は猫として決して上乘の出来ではない。背といひ毛並といひ顔の造作といひあえて他の猫に勝まさるとは決して思つておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描えがき出されつつあるような妙な姿とは、どうしても思われぬ。第一色が違う。吾輩は波斯産ペルシャさんの猫のごとく黄を含める淡灰色に漆うるしのごとき斑入ふいりの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑うべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色とびいろでもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。その上不思議な事は眼がない。もつともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫めくらだか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれではしようがないと思つた。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおつてやりたいと思つたが、さつきから小便が催うしている。身内みうちの筋肉はむずむずする。最早もはや一分も猶予ゆうよが出来ぬ仕儀しぎとなつたから、やむをえず失敬して両足を前へ存分にして、首を低く押し出してあゝと大だいなる欠伸をした。さてこうなつて見ると、もうおとなしくしていても仕方がない。どうせ主人の予定は打ぶち壊こわしたのだから、ついでに裏へ行つて用を足たそうと思つてのそのそ這い出した。すると主人は失望と怒りを掻かき交ぜたような声をして、座敷の中から「この馬鹿野郎」と怒鳴どなった。この主人は人を罵ののしるときは必ず馬鹿野郎というのが癖である。ほかに悪口の言いようを知らないのだから仕方がないが、今まで辛棒した人の気も知らないで、無暗むやみに馬鹿野郎呼よばわりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背中せなかへ乗る時に少しは好い顔でもするならこの漫罵まんばも甘んじて受けるが、こつちの便利になる事は何一つ快くしてくれな事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷ひどい。元来人間というものは自己の力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出て来て窘じめてやらなくてはこの先どこまで増長するか分らない。

我儘わがままもこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園ちゃえんがある。広くはないが瀟洒さつぱりとした心持ち好く日の当あたる所だ。うちの小供があまり騒いで衆々昼寝の出来ない時や、あまり退屈で腹加減のよくない折などは、吾輩はいつでもここへ出て浩然こうぜんの氣を養うのが例である。ある小春の穏かな日の二時頃であつたが、吾輩は昼飯後ちゆうはんご快よく一睡した後のち、運動かたがたこの茶園へと歩ほを運ばした。茶の木の根を一本一本嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づくのも一向いっこう心付かざるごとく、また心付くも無頓着なるごとく、大きな鼾いびきをして長々と体を横よこたえて眠っている。他ひとの庭内に忍び入るものがかくまで平氣に睡ねむられるものと、吾輩は窃ひそかにその大胆なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫である。わずかに午ごを過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛なげかけて、きらきらする柔毛にこげの間より眼に見えぬ炎でも燃もえ出いずるように思われた。彼は猫中の大王とも云うべきほどの偉大なる体格を有している。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立ちよりつして余念もなく眺ながめていると、静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐ごとうの枝を軽かるく誘つてばらばらと二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかつとその真丸まんまるの眼を開いた。今で

も記憶している。その眼は人間の珍重する琥珀こはくというものよりも遥はるかに美しく輝いていた。彼は身動きもしない。双眸そうぼうの奥から射るとき光を吾輩の矮小わいしょうなる額ひたいの上にあつめて、御めえは一体何だと云った。大王にしては少々言葉が卑いやしいと思ったが何しろその声の底に犬をも挫ひしぐべき力が籠こもっているので吾輩は少なからず恐れを抱いだいた。しかし挨拶あいさつをしないと険呑けんおんのんだと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく平氣を装よそおつて冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓はたしかに平時よりも烈しく鼓動しておつた。彼は大大おおいに輕蔑けいべつせる調子で「何、猫だ？ 猫が聞いてあきらめられんぞ」と大言不慚で答えてゐるんだ」随分傍若無人ばうじやくぶじんである。「吾輩はこの教師の家うちにいるのだ」「どうせそんな事だろうと思つた。いやに瘠やせてるじゃねえか」と大王だけに氣焔きえんを吹きかける。言葉付から察するとどうも良家の猫とも思われない。しかしその膏切あぶらぎつて肥満しているところを見ると御馳走を食つてゐるらしい、豊かに暮しているらしい。吾輩は「そう云う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかつた。「己おれあ車屋の黒くろよ」昂然こうぜんたるものだ。車屋の黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋だけに強いばかりでちつとも教育がないからあまり誰も交際しない。同盟敬遠主義の的まつた奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々輕侮けいぶの念も生じたのである。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるかを試ためしてみようと思つて左さの問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどつちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに極きまつていらあな。御めえのうちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに大分だいぶ強そうだ。車屋にいると御馳走ごちそうが食えろと見えるね」

「何なあにおれなんぞ、どこの国へ行つたつて食い物に不自由はしねえつもりだ。御めえなんかも茶晶ちやばたばかりぐるぐる廻つていねえで、ちつと己おれの後あとへくつ付いて来て見ねえ。一と月とたたねえうちに見違えるように太れるぜ」

「追つてそう願う事にしよう。しかし家うちは教師の方が車屋より大きいのに住んでゐるように思われる」

「箆棒べらぼうめ、うちなんかいくら大きくたつて腹の足たしになるもんか」

彼は大大おおいに肝癪かんしゃくに障さわつた様子で、寒竹かんちくをそいだような耳をしきりとびく付かせてあららかに立ち去つた。吾輩が車屋の黒と知己ちぎになつたのはこれからである。

その後吾輩は度々たびたび黒と邂逅かいこうする。邂逅する毎ごとに彼は車屋相当の氣焔きえんを吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒から聞いたのである。或る日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶晶ちやばたけの中で寝転ねころびながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話じまんばなしをさも新しそうに繰り返したあとで、吾輩に向つて下しものごとく質問した。「御めえは今までに鼠を何匹とつた事がある」智識は黒よりも余程發達しているつもりだが腕力と勇氣とに至つては到底どうてい黒の比較にはならないと覺悟はしていたものの、この間に接したる時は、さすがに極きまりが善よくはなかつた。けれども事實は事實で詐いつわる訳には行かないから、吾輩は「実はどうとうとうと思つてまだ捕とらない」と答えた。黒は彼の鼻の先からびんと突張つぱつてゐる長い髭ひげをびりびりと震ふるわせて非常に笑つた。元來黒は自慢をする丈だけにどこか足りないところがあつて、彼の氣焔きえんを感じたように咽喉のどをころも鳴らして謹聴してればはなはだ御ぎよしやうい猫である。吾輩は彼と近付になつてから直すぐにこの呼吸を飲み込んだからこの場合にもなまじい己おのれを弁護してますます形勢をわるくするのも愚ぐである、いつその事彼に自分の手柄話をしゃべらして御茶を濁すに若しくはないと思案を定さだめた。そこでおとなしく「君などは年であるから大分だいぶんとつたろう」とそそのかして見た。果然彼は牆壁しやうへきの欠所けつしよに呐喊とつかんして来た。「たんとでもねえが三四十はとつたろう」とは得意氣なる彼の答であつた。彼はなお語をつづけて「鼠の百や二百は一人でもいづつでも引き受けるがいたちつてえ奴は手に合わねえ。一度いたちに向つて酷ひどい目に逢あつた」「へえなるほど」と相槌あいづちを打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて云う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰いしばいの袋を持って椽えんの下へ這はい込んだら御めえ大きないたちの野郎が面喰めんくらつて飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちつてけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。こん畜生ちきしようつて氣で追つかけてとうとう泥溝どぶの中へ追ひ込んだと思ひねえ」「うまくやつ